

ロマンティック・ラブ・イデオロギーを分解する
—2015年社会階層とライフコース全国調査（SSL-2015）による、
恋愛・結婚・出生心理の計量分析—

Decomposing Romantic Love Ideology:
Quantitative Analyses of Love, Marriage, and Birth in 2015 Japanese
National Survey on Social Stratification and Life Course (SSL-2015)

小林 盾* 大崎 裕子** 川端 健嗣*** 渡邊 大輔****
Jun Kobayashi Hiroko Osaki Kenji Kawabata Daisuke Watanabe

Abstract

This paper scrutinizes on transformation of the romantic love ideology in Japan. The ideology has characterized the modern family by uniting love, marriage, and sex (and therefore birth). The paper decomposes the ideology into two sub norms: the “love and marriage combination” norm and the “marriage and birth combination” norm. Still, these norms are yet to be quantitatively examined. So, data are collected in the 2015 Japanese National Survey on Social Stratification and Life Course (SSL-2015) with 12,007 respondents. They are asked whether they agree that love is indispensable for marriage and that marriage is so for birth. Results are shown as follows. (1) By distributions, about 80 percent agree with the both norms. (2) By comparing proportions, most young males and females relax the norms. However, young females tighten the “marriage and birth combination” norm. (3) As a result, by odds ratios, young males present consistent patterns on the two norms, while young females not. Therefore, mostly the romantic love ideology has been relaxed, but the “marriage and birth combination” norm survives and even revitalizes. This means that the ideology has been transformed and diversified, which may affect future forms of the family. These findings are obtained only in quantitative analyses.

* 成蹊大学文学部、Faculty of Humanities, Seikei University
jun.kobayashi@fh.seikei.ac.jp

** 東京工業大学環境・社会理工学院、School of Environment and Society, Tokyo Institute of Technology
osakihiroko@gmail.com

*** 成蹊大学文学部、Faculty of Humanities, Seikei University
kawakj@gmail.com

**** 成蹊大学文学部、Faculty of Humanities, Seikei University
dwatanabe@fh.seikei.ac.jp

I. イントロダクション

1. ロマンティック・ラブ・イデオロギーの下位規範

出生動向基本調査によれば、1930年から60年ごろまで初婚同士の結婚のうち、見合い結婚が恋愛結婚より多かった。その後、1970年までに恋愛結婚が上回り、2015年には恋愛結婚が87.7%、見合い結婚が5.5%だった（図1左）。

一方、人口動態調査によれば、非嫡出子（夫婦以外の子）は戦後1947年に3.8%だったのが、1980年ごろ0.8%まで低下し、その後上昇した。2016年には2.3%だった（図1右）。

1970年代に、日本社会では夫婦と子から構成される「標準的家族モデル」が成立した。これを支え規定してきたのが、「ロマンティック・ラブ・イデオロギー」という規範である（ノッター2007）。ロマンティック・ラブ・イデオロギーによれば、恋愛、結婚、性（とその帰結である出生）が、いわば三位一体であるべきと考えられた。この論文では、以下のように定義する。たしかに結婚を中心に概念化もできるが、この論文では恋愛、結婚、出生の3つを等しく扱う立場をとる。

定義 恋愛、結婚、性（とその帰結である出生）が、不可分に結びつくべきとする規範を、「ロマンティック・ラブ・イデオロギー」と呼ぶ。

ここで、この三位一体を、より小さい部分に分解できないだろうか。そこで、家族形成プロセスに沿って「恋愛と結婚は結びつくべき」という「恋愛と結婚の結合」規範と、「結婚と子をもつことは結びつくべき」という「結婚と出生の結合」規範とに、分解できると仮定しよう（図2）。これらを「下位規範」と呼ぶ。

仮定1 ロマンティック・ラブ・イデオロギーは、「恋愛と結婚の結合」と「結婚と出生の結合」という2つの下位規範に、分解できる。

すると、推移律により、「恋愛するからには、子をもたなくてはならない」という「恋愛と出生の結合」規範も成立し、三位一体が復元できることがわかる。小林（2012）は恋愛から結婚への移行を「結婚の壁」、結婚から出生への移行を「出産の壁」と呼んだ（結婚の壁は佐藤他2010より）。ロマンティック・ラブ・イデオロギーのもとでは、この2つの壁を乗り越えた人だけが、子をもつことができる。

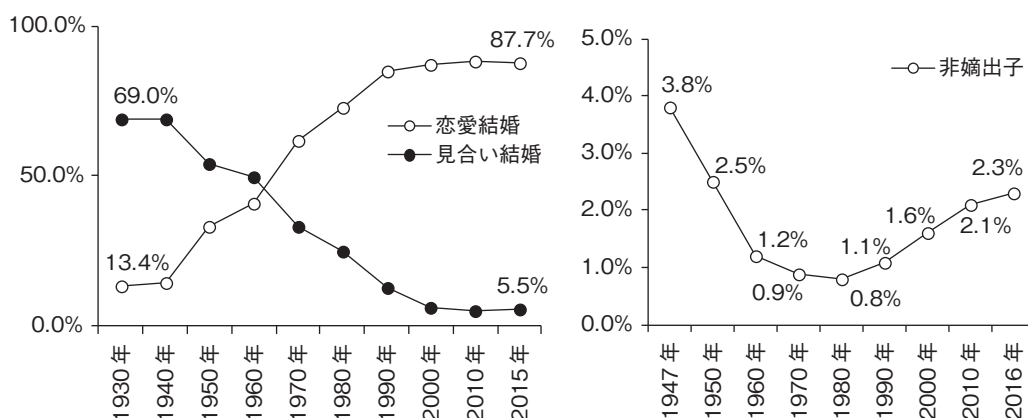
2. リサーチ・クエスチョン

ロマンティック・ラブ・イデオロギーは、しかし、現在では規範意識としても、行動としても、変容し衰退してきたという（上野1992）。同棲、事実婚、同性愛など、家族形成プロセスが多様化し、ロマンティック・ラブ・イデオロギーからは逸脱とされる形が増加したため、規範として規定力が低下し緩みが生じた。その結果、家族のあり方も、このさき大きく変容する可能性がある。

では、下位規範もまた、変容し緩んでいるのだろうか。それとも、ロマンティック・ラブ・イデオロギー全体としては崩れつつも、一部の下位規範は維持されたりかえって強化されることは、ないのだろうか。

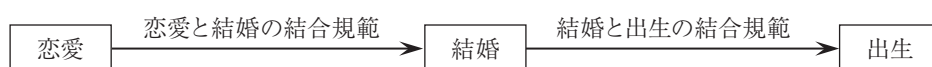
図1より、見合い結婚がほとんどを占めていた時期から、恋愛結婚というオプションも追加され、結婚相手との出会い方が多様化した。その結果、恋愛と結婚の結合が強化されているように見える。他方、非嫡出子が（少ないながら）増加していた。ここからは、結婚と出生の結合

図1 初婚同士における出会いの比率の推移（左）、非嫡出子の比率の推移（右）



出典：出生動向基本調査（左）、人口動態調査（右）

図2 仮定（ロマンティック・ラブ・イデオロギーの下位規範への分解）



注記：矢印は因果関係を表す。

が多様化し、その結果緩んでいる可能性が示唆される。

もしロマンティック・ラブ・イデオロギーに変容が起こったのなら、分解された2つの下位規範の捉え方が、年齢によって異なるはずである。男女によっても異なるかもしれない。そこで、この論文では以下のリサーチ・クエスチョンにアタックする。

リサーチ・クエスチョン 家族形成プロセスが多様化するなか、ロマンティック・ラブ・イデオロギーの下位規範である「恋愛と結婚の結合」規範と「結婚と出生の結合」規範は、変容したのか。変容パターンは、性別によって異なるのか。ロマンティック・ラブ・イデオロギーは家族のあり方を規定してきたので、変容したなら家族の未来も変わるかもしれない。

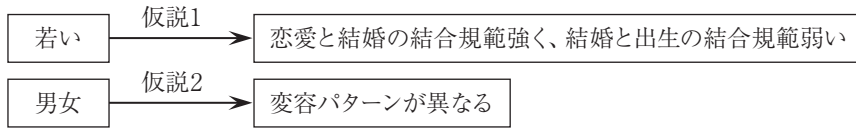
この問題を解明できたなら、家族の未来の選択肢を、より豊かに構想することができよう。しかし、もし未解明のままであれば、ややもすればロマンティック・ラブ・イデオロギーが強化されていても、見すごしかねない。

3. 先行研究

多くの先行研究は、ロマンティック・ラブ・イデオロギーの変容を、事例をもとに質的データで分析してきた（山田1994、谷本2008、山2015など）。そのなかで、谷本・渡邊（2016）は、恋愛と結婚の結合規範に着目し、どのように年齢グループによって異なるかを、量的データで分析した。

その結果、「恋愛のゴールは結婚」という考えは否定するが、「結婚するには恋愛感情が必要」とする人たちが、とくに40代以下の女性に増えたことを明らかにした。彼らは、こうした新し

図3 仮説



注記：矢印は因果関係を表す。

い規範を「ロマンティック・マリッジ・イデオロギー」と呼ぶ。ロマンティック・ラブ・イデオロギーのもとでは、結婚と結合しているかどうか、「正しい恋愛」の審判基準だった。ロマンティック・マリッジ・イデオロギーではぎゃくに、恋愛と結合しているかどうか、「正しい結婚」を決めるようになる。

ただし、恋愛と結婚の結合規範は分析されているが、結婚と出生の結合規範については未解明のままであった。

4. 仮説

それでは、2つの規範について、どのように仮説を立てることができるだろうか。

図1によれば、恋愛結婚、非嫡出子ともに増加しつづけてきた。ここで、こうした人びとの行動が、規範意識とどのように関連するのかを、以下のように仮定しよう。

仮定2 人びとの規範意識は、行動に反映されている。

そうだとすれば、以下の仮説となるはずである（図3）。

仮説1（年齢による違い）（男女とも）若い人ほど、恋愛と結婚の結合規範が強く、結婚と出生の結合規範は弱いだらう。

では、男女の違いはどうだろうか。恋愛、結婚、出生どれも、男女がペアとなることが想定されている。そのため、家族形成パターンは男女で似ているという（恋愛から結婚への移行については小林2014）。一方で、性別によって家族形成パターンが異なることも、報告されている（山田・白河2008、Kobayashi 2017）。そこで、ここでは違いがあると想定し、つぎのように仮説を立てよう。

仮説2（性別による違い） 性別によって、恋愛と結婚の結合規範、結婚と出生の結合規範のどちらも、変容パターンが異なるだらう。

II. 方法

1. データ

データには、2015年社会階層とライフコース全国調査（SSL-2015）を用いて、計量分析を行なう。恋愛と結婚について詳細なデータが必要なため、インターネット調査として実施された（マ

図4 調査画面の例

013 次の意見について、あなたは賛成ですか、反対ですか。

	1	2	3	4	5	6
	反対					賛成
男は男らしく、女は女らしくあるべきだ	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>
恋人になるには、告白が必要だ	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>
浮気や不倫は、絶対にするべきでない	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>
結婚と恋愛は別ものだ	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>
恋愛のゴールは結婚であるべきだ	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>
結婚前には、同棲した方がよい	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>
結婚するには、恋愛感情がなくてはいけない	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>

クロミル社に委託)。調査期間は2015年3月6日（金）23：34～3月10日（火）9：42だった（調査画面の例は図4）。

母集団は、全国20～69歳の個人モニタ91万967人（調査業・広告代理業をのぞく）である。サンプリングは、男女、10歳ごと年齢階級、地域（北海道東北、関東、中部、近畿、中四国、九州沖縄）によって60セルに分割したうえで、2010年国勢調査に基づいて人口比例で標本サイズをセルに割りあてた。

計画標本は11万131人、有効回収数は1万2,007人、有効回収率は11.0%だった。セルごとに回収し、割りあてに達したら打ち切った。不足したセルについては追加依頼をした（途中離脱は3,913人、計画標本の3.6%）。

最大で63問あり、回答時間の中央値は23.6分であった。他にモニタ登録情報として年齢などの属性があった。世帯収入と個人収入に欠損値があったが、他のすべての変数にはなかった。

2. 標本

分析では、すべての標本を用いる。内訳は、男性50.0%、平均年齢45.5歳、中学卒1.6%／高校38.9%／短大・高専11.7%／大学42.7%／大学院5.1%、現在結婚（事実婚・婚約中を含む）62.3%／離別5.5%／死別1.8%／未婚30.4%、正社員・正規の公務員35.1%／自営業主・自由業者・家族従業員・内職9.1%／派遣社員・契約社員・嘱託社員7.1%／パート・アルバイト・臨時雇用14.9%／働き方不明瞭0.0%／学生3.2%／無職30.6%、平均等価所得359.4万円だった（標本サイズは1万2,007人、等価所得のみ1万1,092人）。

3. 従属変数：恋愛・結婚・出生についての心理

調査では、恋愛・結婚・出生についての心理を、以下の6つの項目で質問した。どれも、ロマンティック・ラブ・イデオロギーに親和的な心理となっている。

質問（恋愛と結婚心理） 次の意見について、あなたは賛成ですか、反対ですか。

	反対					賛成
結婚するには、恋愛感情がなくてはいけない	1	2	3	4	5	6
子どもを持つには、結婚することが必要だ	1	2	3	4	5	6
経済的に不安があっても、愛情が高まれば結婚するべきだ	1	2	3	4	5	6
浮気や不倫は、絶対にすべきでない	1	2	3	4	5	6
恋人になるには、告白が必要だ	1	2	3	4	5	6
結婚するには、プロポーズが必要だ	1	2	3	4	5	6

この論文では、上の項目から「恋愛は結婚に必要」「結婚は出生に必要」「愛情あれば結婚」「浮気は不可」「恋愛に告白必要」「結婚にプロポーズ必要」と呼ぼう。このうちとくに、ロマンティック・ラブ・イデオロギーの下位規範として、恋愛と結婚の結合を「恋愛は結婚に必要」によって、結婚と出生の結合を「結婚は出生に必要」によって測定する。

分析では、選択肢1～3を「反対」と、4～6を「賛成」としてまとめ、賛成=1のダミー変数とする。

4. 独立変数、分析方法

独立変数には、性別と10歳ごと年齢階級とを用いる。

分析では、男女別、年齢階級別に、従属変数の比率と、2規範への賛否のオッズ比を比較する。検定にはカイ二乗検定を行なう。

Ⅲ. 分析結果

1. 分布、グループ別比較

6つの従属変数の分布は、図5となった。ここから、「愛情あれば結婚するべき」が5割ほどだったのを除くと、ほとんどの項目で7～8割の人が、ロマンティック・ラブ・イデオロギーに親和的な考え方をもっていることが分かる。したがって、ロマンティック・ラブ・イデオロギーは、単純に衰退したり解体したというわけではない。むしろ、例外を含みながら、しかし大多数は規範として内面化していると理解するべきだろう。

男女別、年齢別の記述統計は、表1となった。ここから、男性ほど愛情あれば結婚すべきで、恋愛に告白が必要と、有意に考えていた。女性ほど、結婚は出生に必要で、浮気は不可であり、結婚にプロポーズが必要と有意に思っていた。恋愛が結婚に必要なかについては、男女差がなかった。

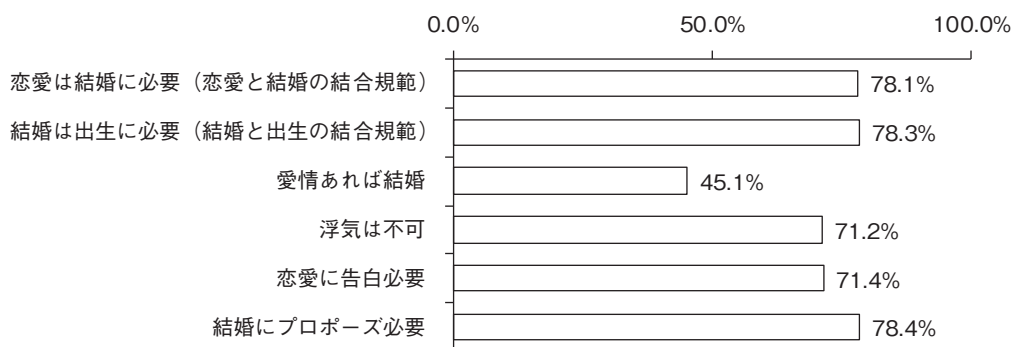
年齢別ではどうか。おおむね、60代で高く、いったん低下してから、20～30代でまた上昇するというパターンとなっていた。

2. 下位規範のクロス表、オッズ比

以下では、仮説を検証するために、「恋愛は結婚に必要」と「結婚は出生に必要」という、ロマンティック・ラブ・イデオロギーの2つの下位規範に焦点を絞る。

クロス表を求めると、表2となった。カイ二乗検定で有意だったことから、2つの規範は有意

図5 従属変数の分布



注記：すべて $N = 12,007$ 。すべて選択肢4～6(賛成) = 1のダミー変数。

表1 従属変数の記述統計

		N	恋愛は結婚に必要	結婚は出生に必要	愛情あれば結婚	浮気は不可	恋愛に告白必要	結婚にプロポーズ必要
全体		12,007	78.1%	78.3%	45.1%	71.2%	71.4%	78.4%
男女別	男性	6,004	78.1%	76.2%	51.1%	65.6%	74.0%	76.7%
	女性	6,003	78.0%	80.5%	39.2%	76.7%	68.9%	80.0%
	カイ二乗検定			***	***	***	***	***
年齢別	20代	1,968	74.2%	76.7%	45.3%	77.3%	75.4%	80.5%
	30代	2,579	75.3%	75.9%	44.0%	73.6%	72.4%	77.9%
	40代	2,440	79.1%	76.7%	43.3%	67.2%	71.4%	78.3%
	50代	2,379	80.2%	76.9%	43.3%	67.6%	69.5%	76.3%
	60代	2,641	80.7%	84.8%	49.5%	71.1%	69.3%	79.2%
	カイ二乗検定			***	***	***	***	***

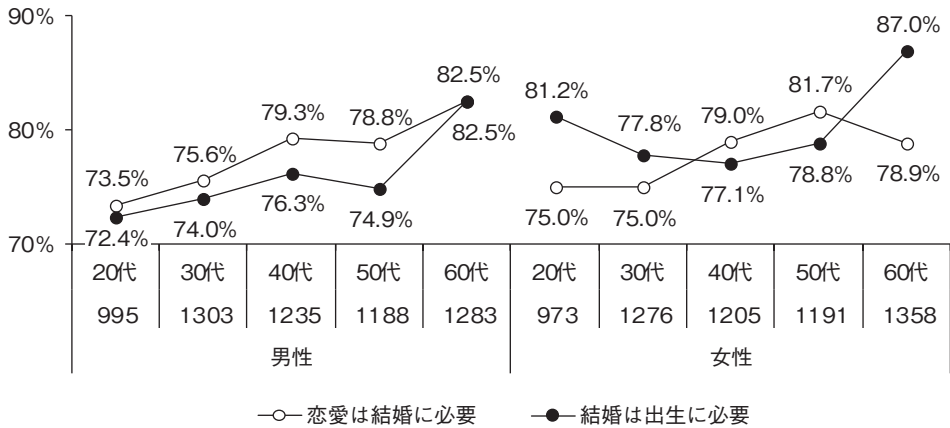
注記：すべて選択肢4～6(賛成) = 1のダミー変数。カイ二乗検定で*** $p < .001$, ** $p < .01$, * $p < .05$, † $p < .10$ 。

表2 ロマンティック・ラブ・イデオロギーの下位規範のクロス表

恋愛は結婚に必要	結婚は出生に必要	
	反対	賛成
反対	1,163	1,471
行%	44.2%	55.8%
全体%	9.7%	12.3%
賛成	1,437	7,936
行%	15.3%	84.7%
全体%	12.0%	66.1%

注記：値は度数。カイ二乗検定で0.1%水準で有意。オッズ比は4.4。

図6 男女かつ年齢別、ロマンティック・ラブ・イデオロギーの下位規範の比率



注記：N = 12,007。下位規範とは「恋愛は結婚に必要」「結婚は出生に必要」の2つ。年齢の下の数字はグループ別標本サイズ。カイ二乗検定はすべて0.1%水準で有意。

に関連していることが分かる。オッズ比を求めると、4.4であった。つまり、恋愛は結婚に必要と考える人は、そうでない人と比べ、結婚は出生に必要だと4.4倍思いやすかった。

じっさい、表2より、「どちらにも賛成」と「どちらにも反対」を合計すると全体の75.8%いた。こうした人びとは、一貫してロマンティック・ラブ・イデオロギーに賛成または反対している。

ただし、全員がそうなのではない。片方に賛成するが、もう片方には反対という人が、24.2%いた。

3. 男女かつ年齢グループ別の比較

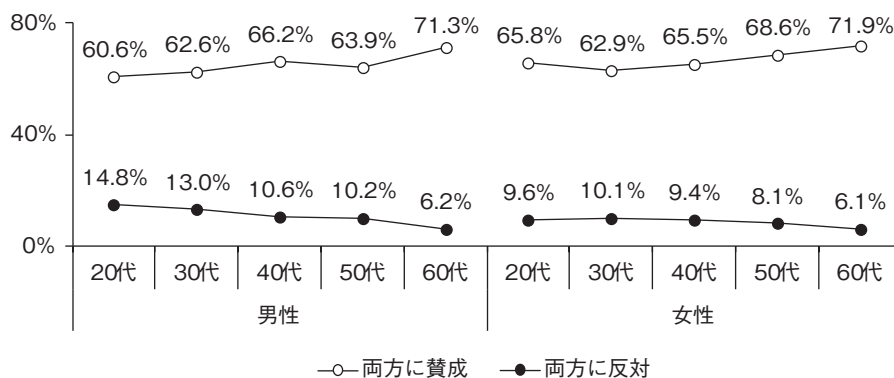
男女と年齢で同時にグループに分けると、2つの規範はどのような特徴をもつだろうか。それが図6である。ここから、折れ線グラフがおおむね右上がりであるので、男女ともに、若い人ほどロマンティック・ラブ・イデオロギーの拘束が弱かった。

ただし、結婚と出生の結合についてのみ、20～30代女性で上昇していた。なぜだろうか。1つの解釈は、若年女性が出生を自分のこととしてイメージしたとき、「日本社会では出産・育児の支援制度が不十分なため、結婚し配偶者がいないととても乗りきることができない」と考えるからかもしれない。そうだとすれば、ここでの下位規範の上昇は、現実的で合理的な判断といえる。

では、男女で変容パターンに、違いはあるのだろうか。図6からも示唆されるが、より明確にするために、下位規範の「両方に賛成」と「両方に反対」の人の比率を、同じようにグラフにした（図7）。ここから、男女ともに、若い人ほど両方賛成が減り、両方反対が増えている。ただし、男性のほうがその傾向が強く、急激に変容しているようにみえる。

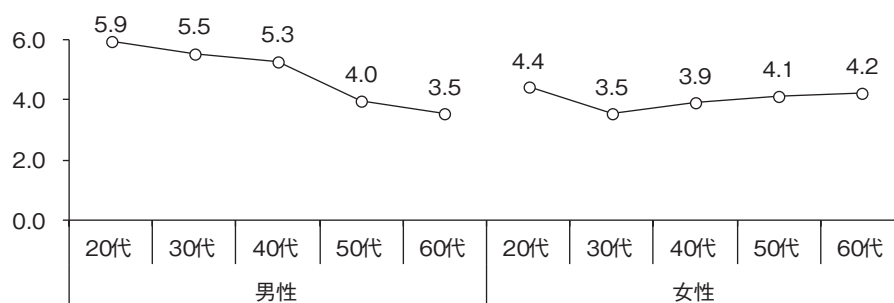
そこで、2変数の関連の強さをオッズ比で表そう。すると、図8となった。ここから、男性は若い人ほど関連が強くなるが、女性はむしろ（20代を例外として）弱くっている。したがって、若い男性は、ロマンティック・ラブ・イデオロギーの下位規範にたいし、（どちらも賛成かどちらも反対という）一貫した態度をとりやすい。女性はぎゃくに、若くなるほど一貫せず、「どちらか一方には賛成」も増えていることが分かった（ただし、オッズ比の信頼区間を求めると、女性には変化があったとはいえない）。

図7 男女かつ年齢別、ロマンティック・ラブ・イデオロギーの下位規範の「両方に賛成」「両方に反対」の比率



注記：N = 12,007。標本サイズは図6参照。下位規範とは「恋愛は結婚に必要」「結婚は出生に必要」の2つ。カイ二乗検定は1%水準（女性における両方に反対）または0.1%水準（それ以外）で有意。

図8 男女かつ年齢別、ロマンティック・ラブ・イデオロギーの下位規範のオッズ比



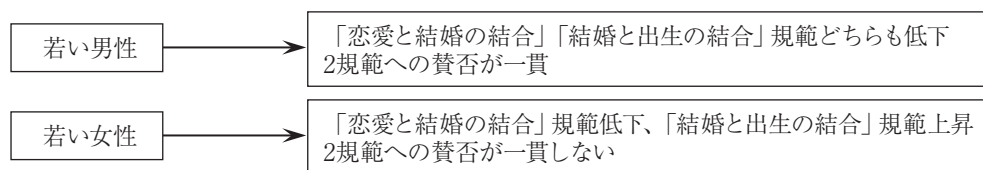
注記：N = 12,007。標本サイズは図6参照。下位規範とは「恋愛は結婚に必要」「結婚は出生に必要」の2つ。男性でもっとも低い60代の95%信頼区間は2.6～4.9、女性でもっとも低い30代のそれは2.7～4.7。

IV. 考察

1. 分析結果の要約、仮説の検証

- (1) この論文では、ロマンティック・ラブ・イデオロギーを、「恋愛と結婚の結合」と「結婚と出生の結合」という2つの下位規範に分解したうえで、それぞれの変容パターンを男女別、年齢別に、量的に検討した。ロマンティック・ラブ・イデオロギーは現代の家族のあり方を規定してきたので、その変容は家族の未来を変えるだろう。
- (2) データとして、2015年社会階層とライフコース全国調査を用い、恋愛と結婚の結合規範を「恋愛が結婚に必要か」、結婚と出生の結合規範を「結婚が出生に必要か」への賛否として測定した。
- (3) 分布から、どちらの規範も8割ほどが賛成していた。クロス表から、両方に賛成する人は、全体の7割ほどだった。そのため、ロマンティック・ラブ・イデオロギーは衰退したわけではなく、むしろ根強く内面化されていた。
- (4) 男女と年齢で同時にグループ分けして比較すると、おおむね若い人ほど、どちらの規範も弱まった。ただし、若い女性では、結婚と出生の結合規範が強まった。その結果、2つの規範のオッズ

図9 分析結果の要約



注記：矢印は因果関係を表す。

ズ比から、若い男性は一貫した態度をとるが、女性は「どちらか一方に賛成」も増えた（まとめると図9）。

したがって、仮説1（年齢による違い）は、一部支持された（若い男性ほど結婚と出生の結合規範が弱かった）が、それ以外は支持されなかった。ということは、行動レベルでは恋愛結婚が増加しても、心理レベルでは（男女とも）恋愛と結婚の結合が弱まっていた。行動レベルでは非嫡出子が増えているが、心理レベルでは（女性は）結婚と出生の結合が強化されていた。

仮説2（性別による違い）はどうか。こちらは支持された（若い男性ほど2つの下位規範への態度が一貫し整合的だったが、若い女性ほど非整合的だった）。若い女性で結婚と出生の結合規範が復活していることが、このような形で現れているようだ。検証結果をまとめると、以下となる。

仮説の検証結果 仮説1（年齢による違い）は、一部支持された（若い男性ほど結婚と出生の結合規範が低下したことのみ）。仮説2（性別による違い）は、支持された（男性は下位規範への態度が一貫し、女性はしなかった）。

2. リサーチ・クエスチョンへの回答

このように、ロマンティック・ラブ・イデオロギーを2つの規範に分解してみると、全体としては低下しているといえる。ただし、女性では若い人ほど、結婚と出生の結合規範が根強く、むしろ20～30代で復活していることが分かった。

先行研究と比較すると、ロマンティック・ラブ・イデオロギーは先行研究どおりおおむね低下しているが、一部は継続していた。したがって、変容はけっして一様なのではなく、規範ごと、男女ごとに多様なパターンをもつことが明らかになった。これらは、ロマンティック・ラブ・イデオロギー規範を分解し、量的に分析することで、はじめて解明できたことである。

以上から、リサーチ・クエスチョンに以下のように回答できる。

リサーチ・クエスチョンへの回答 ロマンティック・ラブ・イデオロギーを「恋愛と結婚の結合」と「結婚と出生の結合」という2つの下位規範へと分解すると、おおむね男女ともに若い人ほど規範が弛緩したが、女性では結婚と出生の結合規範がむしろ強化されていた。その結果、男性は若い人ほど2規範への賛否が一貫するが、女性はむしろ一貫しなかった。このように、ロマンティック・ラブ・イデオロギーの変容は、多様な形で進んでいる。これに応じ、家族の未来形が多様化する可能性がある。

いわば、ロマンティック・ラブ・イデオロギーという大きなアイドル・グループは、人気が低

下してきた。しかしながら、そのなかの何人か（下位規範）は、個人としてかえって人気を得ているのかもしれない。

3. インタビュー結果

では、これらの量的データ分析の結果は、インタビュー調査による質的データからも支持されるのだろうか。30代女性Aさん（会社員）は、大学在学中に見合いをし、卒業後に20代で結婚した。現在は2人の子どもがいる。

小林「見合い結婚だったということは、恋愛結婚とは違うのでしょうか」

Aさん「たしかに出会いはお見合いでしたけど、そのあと1年ほど交際して、ああこの人となら一生を過ごせるかな、この人のことが好きだなと感じました」

小林「ということは、お見合いであっても、恋愛感情をもつことは必要なのでしょうか」

Aさん「私には、そうでしたね」

Aさんは、見合い結婚であっても、恋愛感情が欲しかったという。このように、恋愛と結婚の結合規範は、インタビュー調査では数多く観察された。量的データでは（減少中とはいえ全体で）8割ほどが賛成していたので、一致した結果といえる。

結婚と出生の結合規範については、どうだろうか。30代女性Bさん（団体職員）は、結婚紹介所をとおして見合いをし、交際数か月で婚約した。

小林「婚活しようと思ったきっかけは、なにかあったのでしょうか」

Bさん「子どもが欲しかったので、年齢を考えて、少しでも早く結婚できるならと思いました」

小林「そうすると、結婚しないで出産というのは。。。」

Bさん「まったく考えていませんでしたね」

Bさんは、子どもをもちたいという気持ちが、結婚の最大の理由だったという。このように、結婚と出生の結合規範は、とくに女性の間で根強いようである。量的データでも、若年女性で増加していた。

4. 今後の課題

- (1) この論文では、ロマンティック・ラブ・イデオロギーの変容パターンを解明した。しかし、なぜこのような多様な形となったのかについて、メカニズムを理論的に説明する必要がある（たとえば小林2017は合理的選択理論に基づいて結婚のメカニズムを分析した）。年齢、時代、コーホートのどれかの効果かもしれないし、それ以外の要因によるのかもしれない。
- (2) ロマンティック・ラブ・イデオロギーという規範意識の変化が、家族形成やライフコースにおける人びとの行動と、どのように関連するのだろうか（家族形成の実態については内閣府2011、恋愛から結婚への移行の実態については小林・大崎2016）。仮説1の検証結果のように、規範意識はかならずしも行動と一致しない。さりとて、まったく無関係ではありえないだろう（小林2002）。
- (3) ロマンティック・ラブ・イデオロギーが家族を規定してきたなら、それが変容し多様化すれば、家族の形も変わらざるをえないだろう。ありうるシナリオを想定し選択肢を提示するには、この論文のような量的データ分析に加え、インタビュー調査などの質的データ分析も用いて、

混合研究方法によって多角的にアプローチすることが適しているだろう。

[謝辞]

この研究は、成蹊大学アジア太平洋研究センター助成「ライフコースの国際比較研究：多様性と不平等への社会的アプローチ」（共同プロジェクト、代表小林盾）、JSPS 科研費 24330160 「少子化社会における家族形成格差の調査研究：ソーシャル・キャピタル論アプローチ」（基盤研究B、代表小林盾）、JSPS 科研費 16H03699 「未婚化社会における『結婚支援活動』の実証研究」（基盤研究B、代表山田昌弘）の助成を受けています。執筆に当たり、谷本奈穂氏、筒井淳也氏、内藤準氏、森田厚氏、山田昌弘氏から有益なコメントをいただきました。

参考文献

<日本語文献>

- 上野千鶴子 1992年 「ロマンチックラブ・イデオロギーの解体」『増補<私>探しゲーム』、東京：筑摩書房。
- 小林盾 2002年 「社会規範の数理社会学に向けて」『理論と方法』17巻2号、183-194頁。
- 小林盾 2012年 「恋愛の壁、結婚の壁——ソーシャル・キャピタルの役割」『成蹊大学文学部紀要』47号、157-164頁。
- 小林盾 2014年 「結婚とソーシャル・キャピタル——何人と恋愛すれば結婚できるのか」辻竜平・佐藤嘉倫編『ソーシャル・キャピタルと格差社会——幸福の計量社会学』、東京：東京大学出版会。
- 小林盾・大崎裕子 2016年 「恋愛経験は結婚の前提条件か——2015年家族形成とキャリア形成についての全国調査による量的測定」『成蹊人文研究』24号、1-15頁。
- 小林盾 2017年 『ライフスタイルの社会学——データからみる日本社会の多様な格差』、東京：東京大学出版会。
- 佐藤博樹・永井暁子・三輪哲編 2010年 『結婚の壁——非婚・晩婚の構造』、東京：勁草書房。
- 谷本奈穂 2008年 『恋愛の社会学——「遊び」とロマンティック・ラブの変容』、東京：青弓社。
- 谷本奈穂・渡邊大輔 2016年 「ロマンティック・ラブ・イデオロギー再考——恋愛研究の視点から」『理論と方法』31巻1号、55-69頁。
- 内閣府 2011年 『結婚・家族形成に関する調査報告書』。
- ノッター、デビッド 2007年 『純潔の近代——近代家族と親密性の比較社会学』、東京：慶應義塾大学出版会。
- 山幸代 2015年 「多様なパートナーシップの可能性——夫婦関係の脱制度化と親密性の変容」『佛大社会学』39号、17-28頁。
- 山田昌弘 1994年 『近代家族のゆくえ——家族と愛情のパラドックス』、東京：新曜社。
- 山田昌弘・白河桃子 2008年 『「婚活」時代』、東京：ディスカヴァー・トゥエンティワン。

<外国語文献>

- Kobayashi, J., 2017, "Have Japanese People Become Asexual?: Love in Japan," *International Journal of Japanese Sociology* 26, pp.13-22.